

せんだい郷土エッセイ 「郷六ものがたり」

郷六一すぐそばにある村を歩く②

まばゆい光のもと豊作を願う

「松尾神社のお祭りは5月5日です。来てみませんか」とお誘いを受けたのは昨年の4月末頃。教えられた場所は広瀬川の左岸、定義如来へと通じる県道55号線沿いの針生進さん宅で、なんとその敷地が標高300mほどの権現森山の頂上にある松尾神社の参道入口なのだった。郷六は広瀬川の両岸を占める広い地区だ。松尾神社は伊達家がこの地を治める以前からの郷六の守護神だという。



松尾神社の春祭り。
鳥居の先には石積みの急な参道が続く。

5人の氏子の方が集まり、大幟を立てるための竿を倉庫から運び出していた。針生さんが祭りに備え、参道に通じる田んぼわきの畦道の草をきれいに刈り払ったのが見てとれる。その道を2人が10mほどもある竿を肩に担ぎ、えっちらおっちら。ついて行くと立派な石の鳥居が立ち、その先には急な参道が続いている。早速、竿を寝せ、大幟を通す作業が始まった。「あれ、こうだっけ?」「1年経つと忘れるなあ」苦笑いしながら手を動かしていると、遠くで鶯がさえずる。「おおいいねえ」「おら家にも来たよ」春の息吹に誘われ出てくる話



針生進さん、
千枝子さん。
敷地の中に
踏切がある。

が心地いい。青空に大幟を高く掲げ、その下に三宝に載せたお神酒、稻穂、果物を供えたところで、宮司さんがやってきた。祝詞に続き、一同が深々と頭を垂れる。長い年月、この春祭りに願ってきたのは豊作であったろう。

直会は庭先でのお茶飲み会。コロナ禍以降は食事会はせずお弁当配布にしたのだそうだ。逆さにしたコンテナを椅子代わりにみんなが掛けると、針生さんが勝手口にいる奥さんから手渡された菓子鉢を並べ、何度もお茶をついで回った。3月の地震で参道の石組みが傷んでいる話などが出る。ときおり、目と鼻の先を電車が爆音を響かせ通り過ぎる。驚いたことに敷地を貫くように仙山線の線路が走っているのだ。宮司さんから手渡された束になった御札を5人で分けてお開きに。それぞれが氏子の人たちに配り歩くという。

代々、祭りの準備を担って

幟旗や竿の保管に草刈り、お供えものの準備までを針生家が担っているのはなぜなのだろう。そんな興味が湧いて夏の盛りにお話を聞きに訪ねた。庭にはグラジオラスの花が咲き、鳥居までの畦道には参道に近づけないほど雑草が生い茂っていた。

「うちはここに暮らして3代目なんです。初代の長五郎は“わらじんつあん”って呼ばれて、わらじづくりをしながら茶屋をやってたんだね。松尾神社の祭りのお世話は、自分の記憶にないずっと昔からです」。昭和55(1980)年に倉庫を建て替えたとき大穀の竿の保管場所も新たに設け、それを機に謝礼をいただくようになったというが、それまではあたりまえに無償でやってきたことだった。「この奥に住む方は、お祭りのときは餅をついて紅白餅をつくってお供えしていたんですよ」と妻の千枝子さん。地域の方々が気持ちを寄せ合い手間ひまをかけ、数百年の間守ってきた神社なのだ。雨乞いの神として靈験あらたかだったようで、長く農家の信仰を集めて来たのは間違いない。

針生さんは役所勤めのかたわら、受け継いだ田んぼを守り自家用の米づくりを続けてきた。「昔は土曜半ドンだったでしょう。つきあいは全部断って土日に農作業。仕事仲間に田植えを手伝ってもらったこともあります。終わると餅ついてふるまってね」千枝子さんが「みんな楽しみに来てくれたの。餅いただいたのが忘れられないって、いまだにいわれるんですよ」と微笑む。かつて、田植えは地域が総出でやるものだった。多くの人が勤め人となり、地域縁より会社縁を頼る時代に変わりつつあったのだろうか。そして3年前、針生さんは米づくりをやめた。イノシシの被害があまりに深刻になったからなのだという。

茶の間でお話を聞いていると、ときおり開け放った窓から気持ちのいい涼やかな風が吹き込む。そして15分置きくらいに、仙山線の車両が会話をさえぎるように走り抜ける。緑と風と爆音の鉄道と。つながりそうにないものがここでは一体となって目の前の風景を織りなしていて、お二人とのおだやかな会話の時間は、忘れがたい夏の一コマになった。

郷六に息づく農の風景

針生さんのお宅を抜ける仙山線は、昭和4(1929)年に仙山東線として開通している。そして対岸には昭和50(1975)年インターチェンジが整備され、東北自動車道が開通した。新しい大動脈が次々とこの地区においかぶさってきたわけだが、その下では農業が脈々と受け継がれてきた。もちろん専業農家はいらっしゃらないだろうし、兼業農家の数も少なくなっているだろう。でもそこにはまだ“農の暮らし”が息づいている。春には松尾神社に豊作を祈願し、秋には宇那禰神社に実りを感謝しているのだから。



借りている畠で。
採れた野菜はご
近所に分けてよろ
こばれているそう。

宇那禰神社の下に水田が広がっていたのを思い出し、9月末に訪ねてみた。数日前に大雨に見舞われていたが、午後の明るい日射しの下、黄色に染まった水田は稻刈りの日が近いことを教えてくれた。近くの畠では地元の方が植え付けの準備や白菜の手入れに余念がない。ひと畠ごと違った野菜を植え付けた畠で黙々と作業をする男性がいたので声をかけてみた。「この畠4人で借りているんですよ。定年になって始めたんだけど楽しくてねえ。今日も朝からきてこの時間だ(笑)」そこへお仲間の男性が登場。お二人ともにこやかな実にいい表情をされている。

自然の中にあって作物を育てることは、おだやかで平らかな心持ちをつくるのかもしれない。郷六で農作業まではやれそうにないから、私はせめて果たせなかった松尾神社のお参りをこの春は実現することにしようか。(取材／2022年5月～9月)